

Phantom Quest SpinOff-02.

[最年少 A+の話]

少しカビ臭くて灰かに甘い。

それがここの、匂い。

静かなのにずっと誰かが話しかけてくるような不思議な空間。

ふとした時、俺が訪れる場所。

「ちょっと甘い匂いがするのはなあ、インクや紙や装丁に含まれている化合物の匂いだ」と教えてくれたのは、いつも窓際の陽の当たる席で死んでるように眠っている浮浪者のじじいだった。

じじいは毛むくじゃらでどこに目があるのかどこに口があるのかよくわからなかった。

でも、だから俺はじじいと話すのが嫌ではなかったのかもしれない。昔から人の目を見るのが苦手だ。

どうして？　なんて考えたことはない。

目を見る時は威嚇する時だ。それが俺に染みついた匂い、だった。

その日、珍しくじじいが何かを読んでいた。

けむくじゃらの口元がすこし微笑んでるように見えたのは気のせいだろうか。

「お前も読んでみるか？」

そう言って渡されたのはテラタイムズ。もちろん読む習慣なんてない。

俺がここに来ていたのは寒さを凌ぐためだ。もしくは、逃げ隠れるため。

店先の果物を盗んだ奴がまさか図書館に逃げ込むなんて思う奴はいないらしい。ここに逃げ込んで捕まったことはなかった。

「ほら、ここ」

じじいが指さしたのは『古代遺跡の謎』というコラム欄。

「字は読めるだろ？」

「馬鹿にすんな」

「はは。冗談だ。お前は頭がいい。それは知ってるよ。お前がたまに読んでいる本はバカみたいに頭が良い奴にしか理解のできないものばかりだ。それをお前は面白そうに読んでいる」

「……」

見られていたのか。ということに頭がカッと熱くなる。

「きっとこの記事はお前にとって面白い」

じじいがにやりと笑ったのがわかった。

じじいに勧められた『古代遺跡の謎』というコラムは確かに興味深い記事だった。

いつからだろう。漠然とこの世界の仕組みに興味があった。

どうやってこの世界はできたのか？　この世界に隠された秘密は？　それを解き明かす術は？

そんな途方もない妄想のような考えが頭ん中の全てを支配する。その感覚が心地よくてたまらない。きっとこれは俺にしかわからない。少なくとも俺の周りにこの感覚を共有できる奴なんて存在しない。そう悟った時に感じた「孤独」は、空腹を満たした。――…ような気がした。

「変わった子」「気味が悪い」と囁かれる声をシャットアウトするのは簡単。

じじいに勧められたその記事をきっかけに、俺は図書館中の興味ある文献を読み漁った。

心が躍った…。この、俺がだ。

テラタイムズに載っているトレジャーハンターの記事を読めと渡してきたじじいは、そこには書かれていないことを語り出した。昔、トレジャーハンターをやっていたと言う。

まだ職業として確立していなかったトレハン業界には野蛮な奴らがゴロゴロしていた。その中で自分はなかなか腕の立つトレハンだったと自慢げに語るじじいはいつになく楽しそうだった。

テラタイムズの記事と、じじいの話。

こんな風に何かに夢中になったことはなかった。

寒さを凌ぐ必要のない季節になっても、俺はここに入り浸った。

× × ×

「テンプス島？」

食いついた俺に、じじいは埃をかぶった分厚い本を二冊放り投げてきた。

「遺跡って呼べるかはわかんねえが、きとお前が夢中になる島さ」

「はあ？」

睨んでやったがじじいは笑うばかり。

「全てのトレハンたちの夢だ」

「夢…？」

「その昔ブルースカルっていう大海賊がいた。テラ王国の秘宝にまで手を出した命知らずの海賊さ。そいつらの財宝が眠ってるって言われる島」

「財宝に興味はない」

「んなことは知ってるよ。その島はなあ…現れては消える」

「現れては消える？」

「そう。幻の島」

「ファンタジーやおとぎ話も興味ない」

「ノーチラス」

「…！！」

じじいの口から出た名前に、俺は息を飲んだ。

「最近ちらほら聞くようになったトレハンの名だ。お前も知ってるだろう？ お前が興味ありそうな遺跡の謎を次々に解いて、価値あるお宝を発掘している」

「知ってるよ」

こんなにも自分の鼓動を感じたことはなかった。ドクドクと波打つのが自分でもはっきりとわかる。

「テンプス島の出現は予測不能。だから誰も手を出せなかった。…だが、そいつなら。ノーチラスって野

郎ならその島の謎さえも解いてしまうんじゃないかかって俺は期待してるんだよ。…あれは俺の夢でもあったからな」

じじいの声は興奮に満ちている。

「はっ。じじいが夢語ってんじゃないよ」

「そうだな。でも心が躍るのは隠せねえ。俺が現役だったら奴と……いや」

「ノーチラスには特定のバディがいる。凄腕だってどの記事にも書いてある」

「知ってるよ。じじいが夢語っちゃいけないか？」

「気持ちが悪い」

「ひでえな」

じじいはくくっと笑った。

「まあ、もし俺があと20歳若くてもバディは組まないな。…ってか組めねえよ」

「断られるのがオチだろ」

「……」

じじいが急に黙り込むもんだから、俺は少し戸惑った。

「なんか言えよ」

柄にもなく俺の方から沈黙を破る。

じじいは皺だらけの手をさするばかりで、もう何も言わなかった。

じじいの手には古い傷痕があった。その傷が痛々しく見えたのは初めてだった。

× × ×

じじいに勧められたからとは口が裂けても言わなかったが、俺はそれからテンプス島について調べた。王国の秘宝についても。

調べれば調べるほど謎は深まり、俺は抜け出せないほどに没頭していた。

終わりのない計算式は、暗闇の中でひたすらもがき苦しむ感覚に似ている。怖くてたまらない。

光はあると信じてもがいているが、もしかしたら光自体が存在しないのかもしれない…恐怖。

一度陥ったら最後。解けなければ、抜け出す方法は「諦める」しかない。

ひりひりとした感覚。死と隣り合わせ。空腹を超えた先の研ぎ澄まされた世界。

「食え」

じじいが放り投げてきたのはカビ臭いパンの欠片だった。

いらぬとは言わなかった。食わないと死ぬ。死んだらこの謎は解けない。

死ぬことよりもそれは悔しいことだと思えた。

生に執着したのは初めてだったかもしれない。

「…くくっ。やりやがった」

じじいが最新のテラタイムズを放り投げてきた。なんでもかんでも放り投げる癖、どうにかしやがれ。

俺の目に飛び込んできた記事は、俺の体温を否応なしに上げた。

「テンプス島の出現予測が…出た!？」

「A+級のクエストが組まれるとさ」

そこに書かれていた出現予測日時の詳細。俺の中で行き止まりだった計算式が目まぐるしく組み立て直されていく。眩しいほどの光に暗闇が侵略されていく。

「……」

呼吸ってどうするんだっけ？

この震えはどうしたら止まる？

血の気は引いているのに全身が熱くて、目の前がちかちかする。

「おい。大丈夫か？」

じじいの声が遠くに聞こえる。

明らかな敗北。

それが俺を突き動かしたのは間違いない。

「トレハンになるにはどうすればいい？」

呟くように俺の口から出た言葉は本心だった。恥ずかしくてどうにかかなりそうだったが、きっとじじいなら面白いと乗ってくるはずだ。だがじじいから出た言葉は…

「やめておけ」

「……え」

「やめておけ」

同じトーンで二回繰り返された。じじいの皺だらけの傷痕がやたら目につく。

「面倒くせえからか？」

「違う」

「じゃあ」

「トレハンなんてやめておけ。お前にはもっと」

「自分のミスでバディを失った老いぼれ野郎が教えることは何もないってか？」

「……」

じじいを取り巻く空気に鋭い怒りが宿ったのがわかった。情けないが怯んだのは嘘じゃない。勝てないと瞬時に悟った。が、ここで食い下がるわけにはいかない。毛むくじゃらなじじいの横顔を睨み続けていると、漂う空気は哀しみに似た色に変わっていった。

「…知っていたのか」

じじいの声はかすかに震えていた。

「今までのテラタイムズの記事を片っ端から読み漁った。あんたのことが書かれた記事がいくつもあったよ。腕が立つってのは嘘じゃなかったんだな」

きっと俺の声も震えていたに違いない。

「ふん…。テラタイムズには書かれてない武勇伝はまだまだあるぞ」

「話盛りすぎる癖はやめろよ」

じじいは乾いた笑いを浮かべた。そして一つ息を吐いて静かに語り始めた。

「…あいつは慎重に行こうって言うてくれていた。この雲の流れは嵐の前触れだって。天候を読むのが得意な奴だったんだよ。地味だが気が利いて、よく周りを見ていた。俺の無鉄砲も奴がバディだったから

許されていた…と気づいた時は遅かった。突然の激しい雨で崩れた崖から足を滑らせたあいつの手を俺は死んでも離さないと考えたよ。だが…」

じじいは手の傷痕をさする。それはじじいの癖だ。いつだってその傷痕が、その感触がじじいの心を疼かせる。

「その傷はバディにつけられたのか」

俺の言葉は問いに響いただろうか？ 確信に響いただろうか？

「……本当、容赦ない奴だったよ」

力なく笑うじじいは、一回り小さく見えた。

「なあ」

俺はじじいの目を覗き込んだ。毛むくじゃらの中に確かに光る目が、俺の真っすぐな視線を受け止めてくれたのがわかった。

「俺は、バディなんて必要としないくらいのトレハンになる。だから…」

勢いよく頭を下げた。恥ずかしさも悔しさもない。

心の底からの懇願。もちろん、初めてだ。

「……」

じじいはしばらく黙った後にこう聞いた。

「お前、いくつだ」

「14」

「今はトレハン組合に登録しなきゃモグリ扱いだ。実力のあるバディと組んでりゃどうにかなるかもしれねえが一人でのし上がるには登録しておいた方が何かと都合がいい。15になったら登録に行け。興味あるクエストに片っ端から挑戦しろ。トレハンなんて人から教わるもんじゃねえ。己の身体で学ぶしかねえんだよ。そいつの実力は修羅場を潜り抜けた数で決まる」

皺だらけの拳が俺の胸をドンッと突く。

「まずはもっと食え。空腹に慣れるな。食うために生きてんだよ。みんな」

「……」

俺は素直にうなずいた。

× × ×

『幻の島テンプス島攻略ならず！ファントムクエストに終わる！』

テラタイムズの一面を飾ったその記事を俺が目にしたのは、客の靴を磨いている最中だった。

その客は「そんなに興味あるなら」とお代と共にテラタイムズを置いていった。

気が付くと俺は走っていた。

少しカビ臭くて灰かに甘い匂いのする場所へ。

でも、じじいはいなかった。

あの日から、この胸に重すぎる突きをくらった日から、じじいとは会っていない。

会っていない。

俺はここに来なくなったし、じじいもきっとそうだ。

陽の当たる窓際の席に座りテラタイムズを広げる。じじいがそうしていたように。

『ノーチラスが割り出した予測時刻よりも早く消え始めたテンプス島…』

最大の謎が頭を埋め尽くしていく。ああ、この感覚だ。

でも少し前の俺とは違う。

腹は空くのだ。生きねばならないのだ。

誰かが食べものを恵んでくれる時期は過ぎた。盗んで飢えをしのぐ時期も過ぎた。

自分の足で進む時期が来た。

来月、俺は15になる。

じじいが言ったことに従うわけじゃないが、片っ端からやってやろうと決めている。

一人でのし上がれるところまでのし上がってやる。

じじいはきっとどこかでテラタイムズを読むだろう。きっと…

俺の名が載るのを待っていてくれる。

「…ふっ」

そこまで考えて、俺は自分自身に驚いた。思わず笑ってしまうほど。

そうか。待っていて欲しいのか。

知らない感情だ。

悪くない。

「…でも」

そういや、俺は名前を教えてなかったな。

また笑いが込み上げてきた。珍しいこともあるもんだ。

吸い込んだ空気は、少しだけ太陽の匂いがした。

× × ×

「…レオさーん。…シレオさーん」

ああ、うるせえ。

これでもかというくらい眉を顰めてみせと、

「あ、やっと起きた」

明るい色の髪の毛が視界に飛び込んできた。ああ、面倒くせえ。

「もうすぐ着くそうです」

ぱっかぱっか…という長閑な足音に合わせて大きく揺れる荷台。視界いっぱいに広がった明るい色はこいつの頭だけじゃなく、高く積まれた干し草だったのかと起き抜けの頭で考える。

「エトオリの峠を越える荷馬車に乗せてもらえるなんてラッキーでしたね。少し休息もとれてよかったです。昨日は遅くまで作業されてたみたいだったから」

不覚にも、うたたねとは呼べない程にしっかりと寝入っていたらしい。

「思ったよりピンピンしてるじゃねえか」

ばつの悪さは嫌味を言うことで紛らわすことにした。船ではあんだけ酔ってただろうが。

「あの時は緊張しすぎてたのもあってえ…。まあ、もともとそんなに乗り物に強くはないですけどぉ…」

キツすぎる訛りは間抜けな足音のリズムと相性がいいように思えた。

「今は、そのお…、シレオさんが寝ちゃったからしっかりしてなきゃだめだ！と思って気を張っていたら全然平気だったというか…」

「……」

本当に不覚だった。確かに寝不足ではあったが、なぜ俺は落ちてしまったんだ。

すーうはーあ…。

目の前の派手髪野郎が急に深呼吸を始めた。

「何してんだ」

「いやあ、干し草の匂いって好きなんですよね。太陽の匂いって感じがしてえ…」

すーうはーあ…。

「……」

「シレオさん？」

「…夢を見た」

「え…」

ヨークスの目がこれでもかと言うくらい見開いたのを察し、しまったと思ったが遅かった。

「いや、何でもない」

「何でもなくないです。聞きたいです。どんな夢を見たんですか？ 教えてください…ぶっ」

思わず手元の干し草を掴んで投げつけたらヨークスの顔にクリーンヒットした。

ざまあみろ。

「ちょっと…なにをするんですかあ…」

干し草まみれになったこいつの頭は、やっぱり明るくて眩しくて、あの席に座るじじいの毛むくじゃらが太陽に染まるのに似ていて、俺はなんだかほっとした。

「ほら、もうすぐなんだろう。準備しろヨークス」

「…はいい！」

聞き慣れてきた語尾が上がる癖。

小さく深呼吸をしてみると、確かに懐かしい太陽の匂いがした。

× × ×

『最年少 A+級』という記事がテラタイムズに載ったのは半年ほど前。

このままいけば『最年少 S 級』と騒がれるのもそう遠くはない。

どこかの…、きっと陽当たりのよい窓辺で、皺だらけの手がテラタイムズを捲るだろう。

なあ、じじい。いつか…

バディも悪くないって思い始めた話をしにいくから、待ってろ。